

りとにゆーす



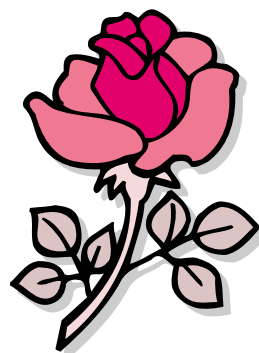
No.57 2008.4.1

新 入 生 歡 迎 号

● Contents ●

- ☆薔薇の名前 p.1
- ☆科学レポート入門 p.2~3
- ☆学科推薦本コーナー p.4~9
- ☆学生との懇談会を行いました。 p.9
- ☆ベストリーダー賞について p.10
- ☆ベストリーダー賞の表彰式が行われました。 p.10
- ☆“図書館オリエンテーション2007” から p.11
- ☆図書館オリエンテーション2008に参加しよう！ ... p.12

編集・発行 岡山理科大学図書館
〒700-0005 岡山市理大町1-1
<http://www.lib.ous.ac.jp>



薔薇の名前

図書館長／中島 聡

宮垣前学長と、ある時、ある書物について語り合ったことがあった。「初めにことばがあった。ことばは神とともにあり、ことばは神であった。」新約聖書ヨハネ福音書の冒頭の語から始まるこの書の題名は、イタリアの記号論者ウンベルト・エーコの著『薔薇の名前』(Il Nome della Rosa)である。

迷宮の構造をもつ図書館を備えた中世末14世紀の修道院で、歴史上実際にあった連続殺人事件をきっかけに、主人公バスカヴィルのウィリアム修道士は、鋭敏な推理で謎を解くなか、一冊の書物の存在を探り出すのである。それは古代最高の学識者ギリシアのアリストテレスの『詩学』である。しかし秘密とされていたこの禁断の書には、実は恐るべき砒素が塗られていた。砒素は無味無臭無色で、少量でも人体に極めて有毒であり、慢性の中毒症状としては、末梢血管の破壊による壊死、剥離性の皮膚炎や重度の色素沈着、骨髄や肝臓、腎臓の障害などがある。だがひたすら真実を知ろうとする修道士たちは、夜な夜な塔上の、手写された夥しい貴重な蔵書のある図書館へ忍んでは、仄暗い部屋のなか、かすかな灯りを頼りに、この書を探り、舐めた指先で頁をめくるのである。そして悲劇は起こったのである。

真理を知ろうと欲した熱い魂の灯りを吹き消したのは何故か。ひたむきに神のことばを求める者たちの生命を奪い去ったのは誰か。盲目の老司書ホルへの言うように、はたして図書館は「知識の保存であって探求ではない。知識に進歩はない」のであろうか。stat rosa pristina nomine nuda tenemus (過ぎし日の薔薇はただその名前だけが残る) ものの本質である薔薇の名と我々が恣意的に付けた薔薇の名。前者を希求することこそ、知識の探求・進歩を願う者の途ではないのか。

さあ！あなたも、魂の内なる灯火を高くかざして、知識の宝庫である図書館の森へ分け入り、真理を求める旅立ちを、今から始めてみませんか。